

Title	昭和十一年春季伊豆下田方面旅行記
Sub Title	
Author	金川, 太郎(Kanagawa, Taro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.129(493)- 134(498)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和十一年伊豆下田方面旅行記

五月二十九日（金）晏、伊木先生御指導の下に、間崎先生、今宮先生、先輩高橋碩一君、學生十一名の一行は、午後十時橋丸にて靈岸島を發つ。

明日を慮つて早速横になつたが、機關の音が耳について何うしても眠れない。漸つとトロ／＼としたと思つたら、擴聲器による君ヶ代のレコードに叩き起された。大島に着いたのだと云ふ。（午前四時）顔を洗つて甲板に出る。晏つてゐて三原山の煙は無論見えない。朝靄の中に光る港のネオン・サインが妙に旅情をそゝる。昨夜に倍して寒い。大島までの船客が多かつたものとみえて船室は一時に空席が出來た。安心したためであらうグッスリ寝込んで了つた。大島下田間の船の動搖は可也甚かつたやうである。微かに意識に残つてゐる。「下田は雨だぜ。」といふ聲を不圖耳にした。

午前七時下田着。

色の褪せた、それでゐてパツとした芝居のセットの様な港だ。一行元氣に船に乗移る。塾の舊ホールと似た建物が、ズラリ行手に並んでゐた。岸壁の上に紫の旗を持つてフラフラしてゐる男が

ゐたが、それが平野屋旅館の番頭であつた。その男に從ひ雨上りの大横町通を眞直ぐ。大同心町に切れて其處が平野屋。廊下の角にお吉のあの検束の無い寫眞が貼つてあつた。色々お世話になつた塾員粕谷源藏氏と朝食の卓を共にする。

八時四十分、遊覽バスにて修福寺に向ふ。修福寺は下田西南五軒竹麻村にあるといふ。車中案内女がゾッとするやうな聲で伊豆半島の來歴を誇々と述べた。九時日野といふ所で下車。ジックリ濕つた田園道を一二町行くと、達ひます達ひますと云ひながら先の案内女が、長靴をガバ／＼云はせて走つて来て、ヘラ／＼笑つてゐた。詰り道が全然違ふと云ふのである。この道を行つたところで修福寺はおろか寺などありませんと云ふ。假令あつたにしても、見渡すところ随分先まで道は續いてゐるやうだし、これ歩いて行けば相當に時間はかゝらうし、内心辟易してゐた一同はホツとした面持であつた。再び車を走らすこと十分。海軍療養所前で降りる。その後ろの細道を登りつめたところが修福寺。懶陶しい日であつたためか大變貧相な感じを受けた。本堂に這入る。文机の上に國寶の大般若經がゴサ／＼と重ねてあつた。體の大きい住職に非常に愛想好く「樂になつて。どうぞ御自由に、手で取つて手で取つて。」と云はれる。が、誰も手を出さない。國寶ともあらうものを、自由にあれこれ弄り廻しても好いのであらうか——こんな心配が一同にあつたのかも知れぬ。私もその一人で、あんまり飾り氣がなき過るので氣持が悪いやら済まないやら。

鳴居に一枚の紙片がぶら下つてゐた。下手な説明に代へるた

國寶書寫大般若經要綱

修理辨寶

- 一、大治五年伊豆守大江通國、源盛頼、僧靜萼等ノ校
 一、正和四年第一回修理、願主顯蓮、執行辨寶
 一、貞治五年補寫 仁科齊藤三郎實春 卷六卷 卷一〇六現存
 一、天文三年寂用英順^{時二年}石門寺ヲ湊ニ移シテ修福寺ト改稱
 一、慶長十八年寂用英順九十九歳ニシテ寂ス
 一、寶曆十年第二回修理、修福寺十四世本淨和尚賚ヲ江戸ニ募
 ル 又卷子本ヲ折本ニ改ム

一、安永二年十五世良歎和尚補寫十五卷現存
 一、文政元年修福寺火災、四百〇一卷ヨリ五百卷マデノ間ニ四十七巻ノ缺アルハ此時焼失セシモノカ
 一、大正八年三月廿八日國寶指定

一、國寶指定五百三十九卷外ニ喜多院版一卷
 以 上

即ちその中で二三眼につくものを拾へば卷二百二十の奥書には
 校了 獻宴

願主顯蓮

修理辨寶

とあり、卷五百五には、

校了 國司通國

右筆 僧範耀

最後の卷六百には、

源盛頼

前住永平修福開基寂用順

和尙慈容衛草詞贊之

天正二年龍集甲戌解制日

とある。通國は當國の國司大江通國で、盛頼は伊豆守盛雅の子であるが、右の奥書に依り通國・盛頼の國司年代も推定され、歴史上注意すべきものである。のみならずかゝる經卷が、そのまま今に保存されてゐるのは幸ろ珍しいことである。

その他當寺開山寂用英順和尚の畫像がある。絹本着色の掛軸だが、それには又次の如き文字が記されてゐた。

眞機清逸大用寂然横括龜毛玄宗獻隣列祖内七掀倒猊座振威烈罵活佛三千把住呈直旨放行打噴參吾道一以貫安住升几眺望太白公案三昧底修補皮履商略誓玄禪文詩共熟德爵齒兼全握全剛劍領衆匡徒智愚辨別入吉祥宅當仁不讓衣鉢單傳□□夫是之謂靈兒五世之的孫□嘎花開枯木春風瑞無盡藏中曹洞禪

前圓覺仁若兒法堯書于關山下

本堂前で住職も入れて寫眞を撮る。十時に終つて再び車上の人

となり、下田東北の白濱神社に向ふ。同じ道を引返すのであるから、説明する事がないらしく、案内女は唐人お吉の略歴を語り出した。お吉は明治二十四年二月二十九日五十歳を以て死んだと云ふ事——これだけが妙に記憶に残つてゐるのは不思議。

下田の町を斜に突ッ切り、十田橋を渡ると直ぐに、歌で有名なお吉が涙で通つたと云はれるあの松原がある。甚だ短い。これでは「駕籠で行くのは……」を全部云はぬ内に、お吉の駕籠はトツトと先に行つて了ふ程である。雌鳩島・犬走島もよく見える。近世文化の黎明をもたらした黒船が、四隻碇を下したのは此の二島の間である。その距離を目測して、玩具の様に小さい黒船が想像出來て滑稽だ。松陰が渡米を企てゝ隠れてゐた辨天島を右に見て、白濱村への道に切込む。

太平洋の蒼茫を臨む景色の好い崖縁を幾曲りかすると白濱に達する。読んで字の如く白砂の長い濱である。「こゝ暫し皆様のお乗物の此の車を駱駝とみたて、南國の情緒を味つて頂きます。」ときた。車に疲れてゐた一同はドツと笑つた。五月には珍しい薄寒い日、南國の情緒を味へとは少し無理である。

白濱明神に詣づ。式内大社伊古奈比咩命神社である。孝安天皇の御宇三宅島より遷座。祭神は官幣大社三島明神の妃の女神。神域は太平洋を背にして老樹鬱蒼たる地である。裏に抜けると濱。潮香を心ゆくまでに吸ふ。こゝでは記念撮影(?)が大流行りであつた。裏山に登つて岩を噛む波を見る。絶景。噴火口かと謂はれた

る神潭「御釜」は崩れて眼下にもの凄い壊をとゞめてゐる。

正午柿崎玉泉寺に着く。

〔安政年間米國領事館〕「不許葦酒入山門」なる石碑を左右にみて

山門を潜る。玉泉寺は、天正以前には眞言宗の草庵であつたが、天正の初め一嶽俊栄和尚が、前代の道眉和尚の念願を受け繼いで、上の山（小字）の地より現在の地に移轉新築した事が現存の棟札によつて知る事が出来る。七間に七間半の本堂は、大正十五年十月に一度修繕されたけれど、解體した譯ではなく、柱などはニスは塗つてあるが昔の儘である。庫裡は昭和二年に新築されて舊形は全然ない。

安政三年七月廿一日、サンゼント号に搭乗、下田港に入津したタウンセンド・ハリスは、再三幕吏と折衝を重ねた結果、遂に玉泉寺の領事館たる事を承認し、通譯ヒュースケン、支那人四人（料理役）を随へ、この寺院の一角に星條旗を翻すに到つた。(在記念碑あり)それは同年八月六日の事であつて、以來安政六年五月卅日公使に昇進して江戸麻布の善福寺に移るまで、四ヶ年こゝにゐた譯である。

その當時、本堂は、ヒュースケンの居間八疊及事務室十二疊、ハリスの居間八疊及事務室十二疊、應接間二十一疊、下岡蓮杖が使用した寫眞現象室の六ツに區分されてゐたらしい。大きい男がウロ～～したら、いろんな物に突當つて仕方がなかつたであらうと思へる程に、この八疊の居間が狭く見えた。ばかりでなく、寝

臺まで此處に持込んでゐたと云ふのであるから、一體日頃何うしてゐたのか想像するに苦しむ。遺物の主なものは、當村名主與平治の日記六冊、下田奉行よりの迴章文、眉毛和尚手記の見聞記（眞言・道釋・下機より聞きしたる各種語の譯）、眉毛和尚を撮影したる銀版寫真、ストーヴの眼鏡石等數多い。

硝子箱の中に屠牛木なるものが飾つてある。本堂前に牛靈供養のため牛王如來を建立してあるが、これは該木の所在地を示すものであつて、牛を繫留し食料に屠殺したものだといふ。が、いくら牛靈に皆持込んで了つたと云ふのが本當であるらしい。

また境内の墓地には、安政年間この地方で歿した米・露二國の海員及ヒュースケンに侍したお福の墓がある。

午後一時平野屋旅館に戻り、晝食を認める。

一時四十分、平野屋を出て了仙寺へ徒步。

了仙寺は七軒町にあり、日蓮宗總本山、身延山久遠寺の直末にして、寛永十二年今村正長の創立にかかる。正長は下田浦方支配の幕吏で、下田のために種々の施設を爲した人である。今も今村三代の墓が境内に存してゐる。當寺は、寛政五年三月松平樂翁、南豆巡見の際宿所に充てられ、安政元年五月には米使ペルリの休息所に定められて、幕府全權林大學頭との間に所謂下田條約十二ヶ條を締結したる所である。

先づ有名な土俗學的珍寶見學の後、寺内西隅丘上にある開國記

念武山閣を見る。開港記念品を始め、佛像・佛具・先住民族の石器・土器及土俗研究資料を豊富に供へ、殊に鈴木吉兵衛氏及現住清水歸一師等の協力により蒐集せられた佛像は、日本の各時代にわたるばかりでなく、支那・印度・シヤム・ビルマ等のものも集めて總數三百點にも及ぶ。

こゝに陳列されてゐるものゝ中で、特に目についたものは、享保三年戊戌十一月廿五日附の大岡越前守等奉行十一人連署せる了仙寺長樂寺境界裁許狀及戸田村太田重郎氏の出品せる「安政二年戸田ニ於チ鑄船建造中露西亞人が描ケル日本畫」とて一本の樹木を正面より寫生したものなどがあつた。

長樂寺（眞言宗）は、矢張り七軒町にあり、紀州高野山金剛峰寺の末にして、本尊は藥師如來である。それは文明七年鍋田の海中より出現したものと傳ふ。創建は弘治三年、開山を尊有と云ふ。こゝは安政元年十二月米使少佐アダムスが幕吏井戸對馬守、下田奉行伊澤美作守、同都筑駿河守等と日米條約の批准交換、又日露條約の調印及批准交換を行つた所である。寺には北條氏勝の文書一通を藏すと云ふが、割愛して寺の外觀を見ただけで辭し去つた。

その足で下田公園に行く。こゝは秀吉の小田原征伐當時、清水氏の籠つてゐた下田城である。下田の生める寫眞術鼻祖下岡蓮杖翁の碑と櫻に入つた猿を見て城址を降りる。因に、蓮杖翁時代の寫眞の寫し方は、今とは全く違つてゐた、銀板の上にコロジオンを塗つて用ゐたものださうで、極く晴天でも露出するには三分位かゝり、從つて寫される人も其の間身動きならず凝つとしてをら

なければならなかつたと云ふ。私ばかりかも知れぬが、これは面白い話だと思ふ。

又も下田町を西南より突き切り、寶福寺(眞言宗)のお吉の墓、海善寺(淨土宗)の十四代將軍家茂手植の松、吉田松陰の宿泊せる廣岡町の下田屋旅館を順次にみる。

安政三年薪炭食料を外國船に供給したと云ふ缺乏所跡が最後に残つたが、こゝが却々見つからぬ。平野屋の番頭も同道してゐたのだけれど、何うしても判らない。附近の人に訊ねてみると、なんと平野屋旅館の前だと云ふ。まるで落語のオチだと一同大笑ひをした程である。左う云へば浪花節の好きさうな番頭であつた。缺乏所跡には、一寸見には全く眼につかぬ物の影にボツンと一つ石碑があつた。

四時半その儘旅館で暫時休息。西岡・神尾の兩君は此の日に歸る。

四時四十五分、自動車にて蓮臺寺温泉に。

寝姿山を遠望し、江川太郎左衛門の反射爐の話、下田富士の傳説を聞き、餅を食つて閑絶したといふ神様を祭つてあるがために、正月餅を食はぬ所だといふ中ノ瀬を通り、途中、お吉入水場として知らるゝお吉ヶ淵を過ぎ、五時半蓮臺寺荘に投宿。夕食後烈しい雨となる。風も出た。

三十一日(日)快晴、午前九時四十五分、宿の直ぐ裏手の天満宮に詣づ。百十一段の急な石段を登り、社頭に額突いて、さて別殿内にある舊蓮臺寺の本尊大日如來を拜見する。大正九年四月十五日國寶に指定されたものだ。木造、結跏趺坐の像で、高さ一米

餘り、智拳印を結び、胸に瓊杵をかけ五智の寶冠を戴き、額面の漆箔も殆んど完存し、眉間に水晶の水毫があり、唇には朱色が殘つてゐる。姿態中正を得て靜寂なる表情に富み、製作優秀にして何處となく藤原式を脱しきらぬ鎌倉初期の特徴を示す。作者は不明だが、地方には稀なるものとして貴い。

急峻な崖道を走るやうにして下り、直き附近の村山庄兵衛氏宅を訪れる。此處は安政元年三月吉田松陰が二十日ばかりの間假寓してゐた所で、家の前には「吉田松陰縛寓之址」と云ふ石碑が建つてゐる。座敷には祭壇を設けて松陰の畫像を掲げ、使用の藥籠、硯及硯箱・机・行燈・茶碗・盃(臺付)・飯櫃(これがバカに大きい)等が陳列されてゐる。

「下田奉行が禁止しましたのでねえ。浪人は泊められんと云ふのでねえ。宅の先祖がねえ。一日だけでもとコクソリお泊め申した譯でねえ。」と刀自の話は容易に盡きない。

松陰を纏まつた先祖といふのは、醫師村山行馬郎で、その娘のお松さんと云ふのが、松陰の身のまはりの世話をしたのであるが、明治三十八年九十幾つかで亡くなつた。下田のお吉の向ふを張る譯ではないが、誰か蓮臺寺の松陰の一齣をものとする士はないか。

二階の八疊は松陰の隠れ間であつて、天井の低い焼けた汚い所だが、勉強の出来さうな部屋ではあつた。出掛けに松陰が皮膚病療治に使用したと云ふ一坪半ばかりの風呂場を見る。震災で皆温泉が止つて了つたので、現在では勿論使はれてはゐない。たゞ記念に残してあるといふ。覗くと薄暗くてよく判らないが、腐敗し

かよつた水が溜つてゐて、何となく氣味が悪い。もし何とかできぬものか。夏は隨分蚊の多いことであらう。記念とてさし出された名簿に署名して辭去す。

蓮臺寺莊に戻り、晝食後解散。

伊木先生、松尾君の二人は天城越を企てられ、湯ヶ野方面に發たる。殘る十一名は下田に出で、バスを乘換へて東海岸を廻り歸に厚くお禮を申上げます。(金川太郎)

遂につく。途中、熱川に一泊した連中もあつた。

日吉臺堅穴住居址發掘報告(概報)

序 言

昭和十一年七月三日より十七日まで三田史學會は間崎万里教授等の主唱に基き、日吉臺堅穴住居址の調査を行つた。

神奈川縣橘樹郡日吉村の本造豫科敷地は、既に本誌第十一卷第一號同第二號及び第十二卷第一號等にも發表せられた如く、先史原史各時代の考古學的遺蹟遺物多數を包括した、斯學研究上甚だ興味ある多摩川下流右岸の一臺地で、今回發掘した遺蹟は、同じくこの臺地上にあり、豫科校舎より南方の體育會と通ずる道路附近に散在したもので、道路開墾により切斷せられた堅穴十基(第一〇一號より第一一〇號まで)の中六基(第一〇一號より第一一〇六號まで)と、第一一〇二號第一一〇三號堅穴間で道路に切斷せられな

い堅穴一基(第一一一號)との合計七基である。

出土した土器は一二の破片を除き全て彌生式で完全な物無く、其の發掘破片總數千百拾四個を算し、石器は半磨製石斧一個を出土しただけである。

以下其の發掘概要を堅穴番號順に記し、詳細な報告は次の機會を俟つ事とする。

發掘概要

七月三日午前中は發掘開始に先き立ち、先づ體育會へ通する道路兩側に断面を現はした堅穴十基の位置を測量するに費す。そして道路東側の西北部に位置した堅穴を第一〇一號とし、南部に行くに従つて順次番號を付し、最後に第一〇二號第一〇三號間の道路に切斷せられなかつた堅穴を第一一一號とする。

第一〇一號

本堅穴は道路東側に其の断面(深サ黒土層表下約一米・ローム層表下約四十釐、幅約三米)を露出したもので、七月三日午後一時から人夫三名を使用して發掘を開始する。約三十分で本堅穴は大部分道路開墾により消失し居り、僅に堅穴東北部分奥行約五十釐を残存せる事を推察し得るに至つたので、都會により此の日は發掘を中止する。

翌四日午後二時より三時まで、前日残し置いた本堅穴の黒土全部を除去し、發掘を終了する。其間、土器片六個(第一號より第六號まで)及び炭化物「竹あり」等を出した。尚、本堅穴の床部には赤き所謂燒土の厚さ平均一釐の層があつた。